

- 天狗倉山エリア
- 旧町エリア
- 自然
- 八鬼山エリア
- 文化

未来のおわせ

ご当地ぶち検定 / テキストブック

ミライノオワセ

| 未来のおわせ向上計画実行委員会 |

尾鷲市中井町12-14(尾鷲観光物産協会内)
 TEL:0597-23-8261 FAX:0597-23-8263
 E-mail : miraowa@owasekankou.com
<https://owasekankou.com>

書 / 川西美智 写真提供 / 尾鷲市教育委員会、山本和彦
 発行 / 未来のおわせ向上計画ご当地ぶち検定テキストブック編集委員会(2021)

[協力] 尾鷲市、尾鷲市教育委員会、三重大学地域拠点サテライト・東紀州サテライト、天狗倉山まるごとプロジェクト、八鬼山荒神堂保存会、おわせふるさとガイドの会、尾鷲セラピストの会、尾鷲市文化財調査委員、尾鷲古文書の会、尾鷲藪漕隊、協同組合尾鷲観光物産協会



未来のおわせ ご当地ぷち検定 | テキストブック

自慢のふるさと、尾鷲の宝、文化財を未来につなぐ

地域への関心を高めていこうと、「ご当地ぷち検定」を開催します。尾鷲市にある文化財を軸に、歴史、文化、産業、観光、自然、風土など多分野にわたり、尾鷲の理解度を認定する検定です。今回の対象エリアは、天狗倉山～まちなか（旧市街地）～八鬼山です。



講座、勉強会、フィールドワークで講師の皆様にお世話になりました。塚本明さん(三重大学人文学部教授)、伊藤裕偉さん(三重県教育委員会事務局)、福田良彦さん(三重県総合博物館みえむ)、野田敦美さん(尾鷲古文書の会)、内山佳和さん(尾鷲セラピストの会)、脇田大輔さん(尾鷲市学芸員)、山本和彦さん(尾鷲市文化財調査委員)、家崎彰さん(海山郷土資料館)。ありがとうございました。

尾鷲の代表的な文化財

文化財は「長い歴史の中で今日まで守り伝えられてきた文化的な財産」を意味し、広い意味を持っている。お寺や仏像、絵画あるいは遠い昔の城跡など、「形あるもの」だけではなく、伝統芸能や工芸技術などの「技」やお祭りなどの地域の伝統的な行事なども文化財で、長い人々のくらしとその地域の風土によって形づくられた景観や伝統的な建物が残る町並みなども、大切な文化財となっている。

目次

天狗倉山エリア

- 01 岩屋堂 P4
- 02 熊野古道伊勢路馬越峠 P6
- 03 可涼園桃乙 P7
- 04 岩船地蔵
- 05 徳本上人名号碑
- 06 宝永津波供養碑 P8
(馬越基地の三界萬霊碑)

旧町エリア

- 07 紙本墨書尾鷲組大庄屋文書 P10
- 08 中村山土井家文庫 P13
- 09 矢浜村方文書
- 10 大曾根浦方文書
- 11 尾鷲ヤーヤ祭 P14
- 12 光林寺縁起書 P16
- 13 金剛寺仁王像 P17
- 14 江戸時代後期の梵鐘 P18
金剛寺・常聲寺
- 15 見世土井家 P19
- 16 常聲寺 毘沙門天石像 P20
- 17 念仏寺 阿弥陀三尊像 P21

自然

- 18 シダ王国 P22
- 19 矢ノ川陰谷樹叢 P23
- 20 尾鷲神社の大樟
- 21 尾鷲市の木・花・魚・鳥 P24

八鬼エリア

- 22 八鬼山道の町石 P26
- 23 八鬼山日輪寺荒神堂 P28
- 24 向井遺跡出土品 P30
- 25 矢浜浄土宝篋印塔 P31
- 26 城山女王滝

文化

- 27 尾鷲節 P32
- 28 集落に伝わる民間信仰 P34
- 29 尾鷲弁 P36
- 30 尾鷲といえば… P38

参考文献：『尾鷲市史上巻』尾鷲市役所(1969)、『尾鷲市史下巻』尾鷲市役所(1971)、尾鷲市文化財調査委員会『尾鷲市の文化財』尾鷲市教育委員会(1987)、「東南海地震から50年 尾鷲を襲った地震と津波」尾鷲市立中央公民館郷土室、「霊場岩屋堂指南」協同組合尾鷲観光物産協会、「紀州の奇祭 尾鷲ヤーヤ祭り」尾鷲神社・協同組合尾鷲観光物産協会、山中充「尾鷲神社祭礼における当屋の役割について」『みえ熊野の歴史と文化シリーズ2』(2002)、『尾鷲節』尾鷲市・尾鷲節保存会、山中充「尾鷲節歌詞解説考」『みえ熊野の歴史と文化シリーズ6』(2006)、太田寿「尾鷲ことば」尾鷲市立中央公民館(1958)、中野朝生『面白紀州弁』(1989)、「八鬼山荒神堂～落慶記念～」八鬼山荒神堂保存会(2019)

01 岩屋堂

いわやどう

天狗倉山
エリア

厳しい自然に祈りを重ねた感動の聖地

山の中に突如現れる岩の塊は、『紀伊国名所図会』*に「天狗岩窟」として紹介される岩屋堂。自然を生かした姿で佇み、かつて西国三十三所の巡礼者は、馬越峠を越え、岩屋堂の観音にもお参りし、旅を続けたといわれている。

※『紀伊国名所図会』

江戸時代後期に紀州藩書物御用達・帯屋の高市志友によって編纂された紀伊国全体に関する地誌

「天狗岩窟」天狗岩より下へ十二町ばかりにあり 岩屋の奥行およそ二間余 内に九尺に二間の堂を立て 石仏の観音を安んず 長さ一尺五寸ばかり 弘法大師の作という 岩屋の左右に三十三体の石仏の観音が建つ



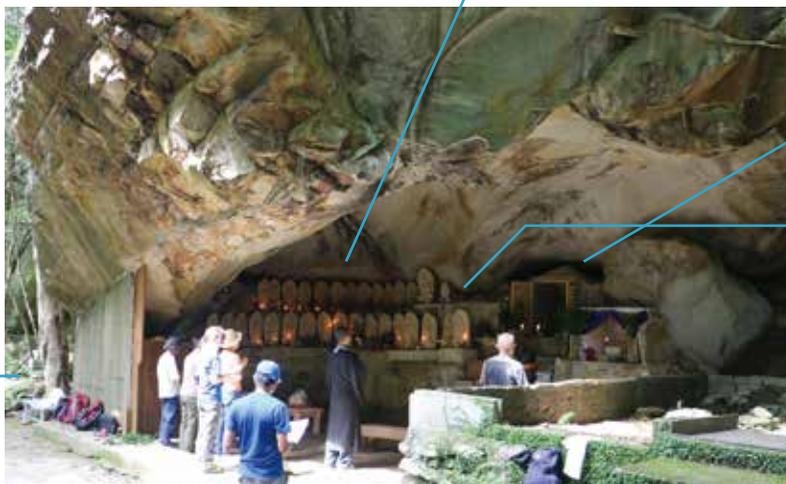
堂宇跡

参道の石段を登ってすぐ左手奥には、お堂跡と思われる石積みが残されている。



卒塔婆と墓石

平家落人景清一族を弔う卒塔婆がある。岩屋堂の南面に常聲寺代々の住職の無縫塔が4基、自然石の墓碑が建つ。



三十三観音石仏

岩屋堂の左側に安置されている32体、および岩屋堂脇の小さな谷の上の祠にある1体の観音石像は、延宝7年(1679)、常聲寺の寿門和尚と雄郭比丘が発願建立したものと伝わっている。1体は約63cm。



本尊・聖観音石像

顔立ち、細い両手、胸腹部の細さ、小さな足など、古い時代の要素をもっていて、蓮台の蓮華に特徴がある。胸や腹部は細かな彫刻で側面から見ると意外に薄く、室町末期(15世紀末~16世紀)頃のもの、となえられている。仏身36cm、蓮台12cm、向背6cm、高さ54cm。



三界萬霊碑

小祠の前にある地藏尊石像は、宝永4年(1707)10月4日の津波供養のためのもの。大地震により東南海道一帯に津波が押し寄せ、尾鷲浦においても栢町(現栄町)まで波が逆のぼり、人家半数が流失したという。



大海龍王 白蛇明神

蛇や龍は水神や海の神として信仰される

本尊の聖観音石像と三十三体の観音石仏が巨岩の下に佇み、険しい自然の中にあって、かつては山岳信仰に基づく修験道が行われていたのではないかとされている。また昭和の初めからは観音講が生まれ、祭礼が毎月1日、15日に行われ、毎年3月18日の大祭には本尊のご開帳もあったが、やがて時代と共に訪れる人が減少し、建物が老朽化。しかし、地域には参道を整備し、コハナを供え、祈りの灯を守り続けた姿もあり、平成29年、朽ちかけていた岩屋堂の壁と床、そして納屋を撤去し、将来の維持管理を考える「天狗倉山まるごとプロジェクト」が始動。地域信仰の再現と岩屋堂修復の助成を受け、産学官民一体型のプロジェクトが行われた。毎月18日を観音参りの日と定め、人々が集う。



山の神

木製の耕具や男根型を供え、豊作を祈る



稲荷社

神様の通り道といわれる穴が、壁に開く

先祖道

岩屋堂には、北浦町から「先祖道」と呼ばれる道があり、馬越町に出て、石畳で整えられた参道が続いている。

文化財
memo

名称：岩屋堂の石仏
区分：市指定民俗文化財(有形)
登録：昭和46年(1971)12月16日
所在地：尾鷲市南浦
所有者：常聲寺

02 熊野古道 馬越峠

まごせとうげ

天狗倉山
エリア

尾鷲の雨にも耐え続ける重厚な石畳道

江戸時代の書物に「間越峠」と表記された峠越えの古道は、紀北町鷲下と尾鷲市北浦町を結ぶもの。重厚な自然石が折り重なるように敷き詰められた石畳が、日本でもトップクラスの雨量を誇る尾鷲の雨から道を守り、良好な状態で残されている。峠の途中には一里塚や夜泣き地蔵と呼ばれる地蔵尊が祀られていた小祠などがあり、峠にはかつて岩船地蔵堂と呼ばれた堂宇と、その向かいに茶屋があり、周囲の石垣などから、ありし日の様子が偲ばれる。峠からは頂上の絶景が素晴らしい天狗倉山や便石山への登山コースが整備されている。



伊勢と熊野をつなぐ祈りの道 熊野参詣道(熊野古道)伊勢路

伊勢路は、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成要素の一つで、紀伊半島を東回りに向かう参詣道。特に江戸時代に庶民の伊勢参りが発達すると、近畿一円に所在する西国三十三所の観音霊場への巡礼とも結びつき、伊勢路を通過して熊野へ向かう人々の信仰のための道として大きな役割を果たした。古くには、「伊勢に七度、熊野に三度」という言葉もあったほど、誰もが訪れたいと願う憧れの地。伊勢路には、今もその景観や歴史、文化が随所に息づいている。

世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道

日本のほぼ中央にある紀伊山地には、「熊野三山」「高野山」「吉野・大峯」という三つの霊場があり、自然崇拜に根ざした神道、中国から伝来し日本で独自の展開を見せた仏教、その両者が結びついた修験道など、多様な信仰の形態が育まれてきた。2004年7月に、この三つの霊場とそれらをつなぐ参詣道、そして自然と人の営みが長い時間をかけて形成した文化的景観が、人類共有の財産としてユネスコに認められ、「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録された。



文化財
memo

名称：熊野参詣道馬越峠道
区分：世界遺産
登録：平成18年(2007)7月7日

03 尾鷲俳壇の形成に影響を与えた 可涼園桃乙

天狗倉山
エリア

かりょうえんとういつ

江戸時代後期、嘉永7(1854)年、師である可涼園桃乙を偲び、可涼園社中が建立した句碑(全高195cm)。自然石を俳句の短冊のように彫り、その中に桃乙の句「夜は花の上に音あり山の水」が陰刻されている。句の創作場所は、北浦町から熊野古道を登り、馬越峠の約500m下の地蔵尊のあるところといわれ、現在でも山桜の老樹が残っている。桃乙は近江国の俳人。嘉永5(1852)年に熊野巡遊の旅に出たが、その途中、尾鷲に杖をとめ、約1年間、発句(俳句)の指導をする。尾鷲・相賀・船津に滞在し、その行脚の記録である「烏日記」に、「馬越坂にて、くつはむし道に這出よ馬古世坂」という句もある。尾鷲では早花・春山・竹里・草干などが門弟で、明治になってから桃乙の流れをくむ細々園淇水(土井幹夫)・平山香雨(林兵衛)・東竜孫(宗軒)などの優れた指導者のもとに、尾鷲俳壇が形成される。



文化財
memo

名称：馬越峠の桃乙句碑
区分：市指定有形文化財(建造物)
登録：昭和50年(1975)4月26日
所在地：尾鷲市南浦馬越町
所有者：個人所有

04 海難防止の信仰を集めた 岩船地蔵

天狗倉山
エリア

いわふねじぞう

岩船地蔵の本山は栃木県下都賀郡岩舟町高勝寺。享保のころ(1716年~1736年)、一人の角力取りが、一鉢の地蔵尊を背負って馬越峠に来て岩船地蔵をまつり、茶屋を経営していた世古平兵衛家に婿入りしたといわれる。高さ48cm、蓮台高15cm、船高16cm(船長72cm)、台座高32cmで、全高101cm。岩船には「享保八癸卯二月廿四日、施主茶屋平兵衛」と掘られ、また後世に補填されたと思われる台座に「水岸道翻信士」など水難海難とみられる6名の戒名が刻まれる。古くから海難防止の信仰を集め、尾鷲浦の船乗り・漁師たちが船出するときは岩船地蔵にお参りして出向いたという。



文化財
memo

区分：市指定民俗文化財(有形)
登録：昭和49年(1974)9月6日
所有者：個人所有

05 念佛聖として知られた上人を慕う 徳本上人名号碑

天狗倉山
エリア

とくほんしょうにんみょうごうひ



宝暦8(1758)年、紀州日高郡志賀谷久夫村(現田辺市)に生まれた徳本上人は、27歳で佛門に帰依し、長年にわたり五穀を断ち、木の実や芽だけを食べて暮らす木食の行を修めた。この修行中ひたすら念佛をととなえ、念佛聖として世に知られた人物。木魚と鉦を激しく叩く独自の徳本念佛をひろめ、各地に「念佛講」を作った。上人は、文政元(1818)年に没したが、その徳を慕って文政13(1830)年3月に馬越墓入口に建立。名号碑は、熊野市をはじめ和歌山県側にかなり存在するが、高さ204cmの花崗岩に「南無阿彌陀佛・徳本」と立派に深彫された巨大なものは、他に例がないとされる。

文化財
memo

区分：市指定有形文化財(建造物)
登録：昭和54年(1979)5月25日
所在地：尾鷲市北浦町馬越墓地
所有者：念仏寺



北 浦町にある馬越墓地に所在する楕形の石碑。宝永4年(1707)10月4日に起きた地震による、山崩れと津波の規模、被害の状況、造立の主旨が記され、碑の正面に「塚塚三界萬霊」と刻まれる。

宝永4年、大地震が起こり東南海道一帯に津波が発生。尾鷲浦にも三方から津波が押し寄せ、栢町(現栄町)まで波が逆のぼり、人家半数が流失。碑の銘文に「男女老幼流漂大洋遽然不返見者断腸」と、津波が人をむすさまじさが表され、男女老若の溺死者が千有余人に及んだことを伝えている。

『見聞闕疑集』[享保20年(1735)頃成立した資料の複製]には「流死人五百三十拾餘人其外生類迄流失」と記され、供養碑の「溺死者千有餘人」とは死者数が相違。この流死人530人とい

うのは、宝永7年(1710)に視察にきた巡見使への回答文にもあるが、この中に最も被害があったと思われる堀北浦が書かれておらず、おそらく堀北浦は全滅状態のため未調査のまま他の浦のみを集計したと推測され、堀北浦を加えた千有余人を総数とするのが定説とされている。

碑は、津波から7回忌にあたる正徳3年(1713)10月3日、船津村(現紀北町)永泉寺の師心和尚が碑文を書き、野地村良源寺せつがんの絶岸和尚が建立供養したもの。



尾 鷲市は古来より多くの地震と津波に見舞われ、そのつど被害と犠牲者が出ている。中でも江戸時代に2度、昭和に2度の地震・津波では、甚大な破害を被った。

江戸

■宝永の地震・津波

宝永4年(1707)10月4日、正午頃、東海道沖と南海道沖とからほとんど同時に発生した巨大な双子地震。両地震の時差は数分であったと考えられ、家屋倒壊範囲は東海道から中国・九州にいたる沿岸を襲い、瀬戸内海にも達した。[マグニチュード8.4、津波高4mと推定]

■安政(嘉永)の地震・津波

嘉永7年(1854)11月4日、午前9時ごろ、遠州灘東部の海底を震源地とする「史上最高級の地震」。家屋倒壊範囲は伊豆から伊勢にいたる沿岸、甲斐、信濃、近江、越前、加賀に及び、地震後の津波が房総から土佐にいたる沿岸を襲い、被害を大きくした。三重県域では特に志摩から尾鷲の沿岸部の被害が大きく、尾鷲では大半が被災する程の強大な津波であったと想像できる。宝永時と同程度の規模であるが、宝永時の大惨事を伝える古文書に(「津なみ」)、一刻も早く高所へ避難せよと語られている。[マグニチュード8.4、津波高3~4m]

■内山佳和さんのフィールドワークより 伊勢湾台風のこと

尾鷲神社、金剛寺前を流れる北川。昭和34年(1959)の伊勢湾台風までは、石積みの護岸で、かつてはどんと川、中井川との呼び名もあった。伊勢湾台風で周辺の家は軒先まで水に浸かり、屋根が飛んでいるところもあり、北川は水があふれ、橋は全部流れ落ちた。川には吊り橋が掛けられ、野球ボールやおもちゃ、金魚が流れていたという。その整備に高上げをした堤防がつくられ、今の姿となった。

昭和

■東南海地震・津波

昭和19年(1944)12月7日、午後1時36分頃、紀伊半島東方に発生した地震で震源地は志摩半島の東南40km。津波は伊勢湾、熊野灘沿岸にかけて襲い、その状況が「尾鷲湾では雀島のあたりまで海水が引いて、水深10mの底や防波堤の根回りが現れた。その向こうではムクムクと盛り上がった海面がひとかたまりとなって尾鷲港内めがけて殺到し、浅瀬に近づくにつれ波は一層高くなり、狂奔して町並みを呑み、波頭は北川を逆流して豊栄橋まで達したという。やがて町をうめた海水はおびたけい浮遊物とともに港外に引いていった」(『尾鷲市史下巻(1969)』)と記される。[マグニチュード7.9]

■チリ津波

昭和35年(1960)5月23日チリのチェロ島沖で大地震があり、それにともなう津波が翌24日午前2時頃から日本各地の沿岸に襲来。三陸沿岸、北海道南岸、志摩半島などで大きな被害がでた。尾鷲では、第1波の襲来が午前4時24分、40分後の第2波で海岸部が浸水し、さらに午前5時40分の第3波が最高波となって、異常潮位3m20cmに到達し、以後6時40分まで23波を記録。[津波高3m]

07 紙本墨書 尾鷲組大庄屋文書

しほんぼくしょ おわせぐみおおじょうやもんじょ

旧町
エリア

庶民の生活の喜怒哀楽が示される貴重な文書



紀 州藩領では十数カ村で一つの村組を構成し、尾鷲組では14の村（野地村、堀北浦、中井浦、南浦、林浦、天満浦、水地浦、矢浜村、向井村、大曾根村、行野浦、九木浦、早田浦、須賀利浦）で成り立っていた。各浦村の代表が庄屋で、村組の代表として大庄屋がいた。その歴代大庄屋の管内に関することを記録した公式文書。江戸時代の冊子およそ1万冊、書状や証文など一紙物が1万点以上という膨大な量が残されている。その内容は極めて多様で豊富。また、紀州藩の城下町・和歌山から遠い尾鷲では、大庄屋に強い権限が与えられ、他には見られない文書が作られることとなっていた。また、紀州藩の城下町・和歌山から遠い尾鷲では、大庄屋に強い権限が与えられ、他には見られない文書が作られることとなっていた。

宝永4年(1707)10月4日、大地震津波のため大庄屋役所が流失し、この津波以前の文書は特殊なものを除いて残っていないが、その後の文書は宝永5年(1708)から明治初年まで、28代の大庄屋が引き継ぎ丹念に保存してきた。藩からの触書や村側が出した願書、事件記録、算用帳や土地台帳、宗門帳など、当時の大庄屋役所の文書が大量に伝わり、ほとんど全分野にわたって保存され、現在では合冊製本された1,684冊と、一紙文書1万3千点余が保管されている。

塚本明さんの講座1より

尾鷲組大庄屋文書の魅力

- 江戸時代の尾鷲の人びとの喜怒哀楽、情念が伝わる文書。惨めで情けなく、哀れで人間臭い姿も読み取れる。
- 詫び状の多さや酒の上での失敗、暴言、乱行、そして人びとの失敗や喧嘩、騒動、怒り、悪口など。「犯罪行為」でも、大庄屋役所の権限により「謝罪」で済まされるなど、法よりも慣習が優先される。



写真:1 南浦善右衛門の不行跡詫び状

さまざまな事件の文書：ごくごく一部の事例を紹介

- 文化10年(1813)頃、林浦「おい」という女性が書いた、庄屋へのたどたどしい密告状。
- 19世紀初め、兄弟が父親に出した詫び状。これまでの不孝を詫び、以後毎月米3斗を渡すと約束し、父の後妻になる人が居たら面倒を見るとまで誓約するが、実は文面を作成したのは父親であった。
- 文政13年(1830)、鳥羽で奉公中の太地浦出身の「小しゆん」が仕事を辞めて中井浦嘉蔵と熊野へ。荷坂峠を越え、長島で「心変わり」して同道を拒否。口論、騒動となる。
- 19世紀半ば、野荒らしの嫌疑で捕まった無宿者。吟味時に、これまで口な盗みをしていないとして、火付け盗賊の計画を立てていたことを白状する。
- 天保15年(1844)、念仏寺の門扉に「中井浦庄屋を退役させなければ火を付けるぞ」との脅迫文が届く。
- 宝暦14年(1764)、中井浦仁右衛門の口上書。後妻の連れ子又五郎について、妻の死後に持て余し、勘当を願う。金剛寺に預けるが、ワガママ者ゆえ和尚から戻される。
- 文政10年(1830)3月、南浦善右衛門の不行跡詫び状。平生家業を疎かにし「勿論酒を好む。今後は、酒を一滴も飲まない」と誓約したが、後に失踪する。写真:1
- 文政11年(1828)、中井浦嘉蔵の叱責処分。木本代官、遠路を理由に代官所ではなく大庄屋役所での申し渡しを指示。「我等(代官)が実際に申し渡す場合のように」と大庄屋に命じる。写真:2



写真:2 中井浦嘉蔵の叱責処分指示

* 尾鷲組大庄屋文書の多様性の背景

- 当時の尾鷲：漁業、林業、商業、農業の複合的な産業の構造。人間関係や経済的な取引が複雑であった。
- 人と物資の流通が活発。伊勢参宮文化の影響を受ける。熊野灘の舟運。林業・漁業で必要な奉公人。+ 熊野街道。

* 道の多様性：自然地形、地理的条件と経済活動の多様な展開による。その一つが熊野古道。

- 海の道：全国廻船、沖見航法（港に停泊）。内海廻船、志摩廻船。尾鷲の廻船業。日常の交通手段。
- 陸の道：複雑な地形から様々に展開。近代以降は矢ノ川峠、ゴンドラ、「酷道」、「険道」など。

文化財 memo 区分：県指定有形文化財(文書) 登録：昭和35年(1960)5月17日

塚本明さんの講座2より

尾鷲組大庄屋文書に見る 酒を呑んでの乱暴狼藉とその始末

庶民の生活のなかで作成された文書にも、酒にまつわる話が頻繁に登場している。酒は人間関係の潤滑油となっていた。

1 酒乱事件の一例

文化4年（1807）、南浦与八宅で酒宴騒動が起こる。3月3日の節句時、与八宅にて仲間4人で宴会。そこへ中井浦の千助（専助）が訪れる。

（与八）「よふきた、あがれ」「そちの姉（娘）も来て居るが、呼て酌をさしやうら」（千助）「あほいへ、親が子に酌かさせらるるものか」と、喧嘩、悪口・口論に。
（与八）「やかましいわ、すと出てうせむ」と、千助を庭へ突き落とす。

酔っていた千助は薪で打ち掛かり、鍋を割り、囲炉裏の火を台所に散乱させて大暴れとなる。与八は、雪駄で千助の顔や背中を殴る。

2 詫びる作法と条件

庄屋の家の前にある与八宅で起こった騒動と傷害事件。与八はそれまで同様の事件を数度重ねており、大庄屋は与八の手錠処分と町追放を仰せ付ける。心底を改めた与八は詫び状を提出。以後、人を集めての酒宴はしないと誓約。

だが、翌文化5年（1807）4月、与八は新船の「筒建て祝」に強引に人を呼ぶ。事前に察した南浦庄屋小兵衛は、小遣の又吉を派遣して中止を勧告。しかし与八宅に居た和兵衛（小兵衛の弟）が、又吉をむりやり家に上げ、酒を強いる。膳や腕が散乱し、吸物椀が壊れ、又吉は傷を負い血を流す。大庄屋役所の吟味となり、和兵衛は一時姿をくらまし、兄の庄屋小兵衛は謹慎。大庄屋は木本代官所へ上申する旨を申し渡す。与八は「請人」と共に、今後一生酒を呑まないと涙を流して詫びる。

3 謝罪と容赦 -詫びれば何度でも許される-

- ・詫びる条件には、親兄弟以外の「請人」（=保証人、世話人）が必要。
- ・若者組→親類→村（庄屋）→村組（大庄屋）→代官
- ・代官まで行くことは極めてまれな事例。詫びることで収めて、自分たちの仲間を守る。守ってくれる人が居る限りでの関係が成り立つ。ただ、謝る者は、社会のなかで一定のダメージを受ける。

文書の中に「酒」発見!



天保飢饉時にも大庄屋役宅の隣で酒宴



天保11年(1840)八幡宮祭礼の当屋決め寄合に「酒1升」を160文で購入



林浦長松酒乱一件

08

近世近代の文学及び勸業資料

中村山土井家文庫

旧町
エリア

なかむらやまどいげぶんこ

中村山土井家の当主・故土井幹夫氏の蔵書や草稿を、昭和59年（1984）に孫の土井正生氏が市に寄贈。「大日本山林会報」、「大日本水産会報」、「大日本農会報」等の機関誌類が系統的に遺存し、中央政府関係者となりとりした来信綴・発信文控えから、尾鷲の人々が明治政府の村おこしとどのように関わっていたか、具体的に知ることができる。また尾鷲の俳句結社（楽天社・淡々会）ほかの草稿・書簡、古典・漢籍の「教養資料群」、教科書、尾鷲町時代の議会・行政文書も数多く、尾鷲地域の基礎史料となる情報群として価値が高い。

文化財 memo 区分：市指定有形文化財（書跡）
登録：平成9年（1997）3月24日

09

農業資料が豊富

矢浜村方文書

旧町
エリア

やのはまむらかたもんじょ

紙本墨書 453冊（製本冊数 117冊・13,806枚）。明暦元年（1655）南浦の入作名寄帳をはじめ、正徳4年（1714）・延享5年（1748）の検地帳、延享3年（1746）・享和元年（1801）の名寄帳が完備し、明治9年（1876）地券発行準備の現地反別一筆限名寄帳、明治23年（1890）・34年（1901）の土地台帳など土地に関する文書を備えている。矢浜村に割当てられた免（租税）の村人への割り方、また村財政の基本となる共有田の年貢取立帖・小作米取立帖をはじめ、地下勘定帖が整備されている。農地の生命線である「野田用水路」の修理や大正期の水利組合関係文書、矢浜学校設立当時の基本金の関係文書も残り、当時の実情が見て取れる。

文化財 memo 区分：市指定有形文化財（書跡）
登録：昭和50年（1975）10月1日

10

漁業資料が豊富

大曾根浦方文書

旧町
エリア

おおそねうらかたもんじょ

大曾根浦庄屋の記録した公式文書。宝永3年（1706）から68通の「納銀通」が残っているのをはじめ、土地制度・租税・財政・行政のほか各分野の記録がある。大曾根浦は尾鷲神社との関係が密接で、尾鷲湾内の漁業権を有していたため、漁業に関する記録が特に多量。また地下網経営であったことから、277冊に及ぶ諸魚代割帳は、江戸・明治・大正期の漁業資料として貴重なものである。その代割の方法は江戸期より大正期まで、同じ方法によって分配されており、興味深い内容として注目されている。

文化財 memo 区分：市指定有形文化財（書跡）
登録：昭和46年（1971）12月13日

11 尾鷲ヤーヤ祭 おわせやーやまつり

旧町
エリア

伝統を色濃く残し、宮座と禊屋、町衆の心意気を継承

ヤーヤ祭は2月1日から5日に催される尾鷲神社の祭礼。尾鷲神社は古くから尾鷲七郷〔南浦・中井浦・天満浦・矢浜・向井・大曾根浦・行野浦〕の氏神で、およそ350年前の江戸時代初期からほぼ形を変えずに受け継がれている。



尾 鷲神社の祭神（大宝天王＝牛頭天王＝建速須佐之男命）の武運にすぎり、合戦に大勝利したことを語り継ごうとしたことが発端とされ、鎌倉時代の頃から行われた例大祭、大弓の儀などの神事に、氏子が練りや大名行列、手踊りを取り入れ、基盤がつけられた。地侍衆が親方を務め、宮座制度として神事を行ってきたが、江戸時代に町衆から祭りに参加したいとの声が上ががり、禊屋制がとられるようになった。

18 尾鷲町の20町から3つの町が禊務町となって（令和3年より2つ）、その代表者である禊人と汐撫、弓射が祭り奉仕の主役を務め、華やかで賑やか、かつ神事の厳肅さをも持ち合わせる。「ヤーヤ」の由来は、武士が立合いの名乗りをあげる「ヤーヤ我こそは」からきているという説が一般的。



ヤーヤ見学攻略!

1日 午前零時 御扉開き
午前10時 由緒祭

神様のお出まし。祭りの賑やかな様子をご覧いただく。
午前10時、祭りの歴史を報告する由緒祭。夜7時には氏子全町の総代、町頭、若衆が神社に集結し、祭礼の始まりを告げる在廻り。魚市場岸壁で垢離を掻いて神社に参拝、太鼓や法螺貝を響かせ、「提灯を灯して」市内を練り歩く。「高張提灯の足は決して地面につけない。」

2～4日 練りと襷ぎ祓い

宵宮（よんみや）とも呼ばれる。禊屋のある通りの両側にヒノキの丸太の矢来が組まれ、その前で若者衆が提灯の合図に従い、「ちょうさじゃ、ちょうさじゃ」と掛け声を上げながら激しくぶつかり合う。「子どもたちが自分の町を振り回る「よんみやいでてくれよ～（宵宮へ出てください）」の声も賑やか。」練りのあと、浜（魚市場）へ垢離掻きに向かう。役人らが素っ裸で海に飛び込み、東に向かって柏手（かしわで）を打ち拝礼、身を清める。元々練りは各禊務町の禊人、汐撫、弓射らの役人が垢離掻きや神社参拝に向かう途中、ぶつかり、押し合ったのがはじまりとされる。

5日 例大祭

午前9時半に神事。午後には賑やかな神社への宮上り。獅子舞や神楽のあと、禊受町が尾鷲節踊り、禊務町の大名行列では子役の薙刀振りが勇ましく、各手伝町の手踊りが旧熊野街道を進む。

夜、大弓の儀。紀州・小笠原流の流れを汲む。汐撫が射場を清め、弓射が一立ち2矢ずつを、7立ちし、合計一人14矢ずつ射る。紋付き晴れ着の袴をはいた子どもが矢取役。的に描かれた円を星と呼び、矢が星に当たった禊務町は、後に伊勢神宮へ御礼参りに出向く「星参り」の習慣も伝わる。

弓が終わると御獅子の出御。昔、大曾根浦に流れ着いた獅子頭（文化財のため現在はレプリカ）を神職が頭上に奉持し鳥居へと向かう。これは豊凶を占う神事で、獅子が戻るときに、右回り（西）で帰れば山方が豊作、左回り（東）なら浜方が豊漁だといわれ、若衆が自分たちの方へ向けようと御獅子を取り囲み「お獅子じゃ、お獅子じゃ」の掛け声で押し進む。最後に翌年の禊務町への禊渡しの儀で、親方立ち会いの下、盃を交わし、祭礼の幕が降りる。



文化財 memo

名称：神の依代（よりしろ）として
崇敬される尾鷲神社獅子頭
区分：県指定有形民俗文化財
登録：昭和43年（1968）3月22日
所在地：尾鷲神社 尾鷲市北浦町12-5

尾鷲神社本殿内の獅子殿に安置。大きく見開いた眼、彫りの深い眉やあごひげ、ほほひげの渦巻紋、乱ぐい歯は自由奔放で、室町時代末から桃山時代にかけての特色を見ることができる。享保10年（1725）、藩へ提出した神社調書の控に「大宝天王社、宝物獅子頭一面、但シ雲慶作と申伝候」、また「三重県神社誌」に「文禄年間（1592～5）の彫刻」とある。収納箱に元禄17年（1704）、宝暦9年（1759）、明治41年（1908）の修理記録が残る。



文化財
memo
名称：尾鷲ヤーヤ祭
区分：県選択記録作成等の措置を
構ずべき無形の民俗文化財
登録：平成14年（2002）11月3日

12 光林寺縁起書

こうりんじえんぎしょ

旧町
エリア

尾鷲地方が「志摩州」だったことを物語る



光林寺は、金剛寺の前身。牛の谷に創建され、慶長元年(1596)、汲月和尚が中興したと伝えられる。正徳4年(1714)、護国山金剛寺と改められた。

尾鷲地方は志摩国から紀伊国(=紀州)に編入されたが、慶長6年(1601)の検地には「紀州室(牟婁)郡」などと記録されている。縁起書が書かれた

慶長9年には、すでに紀伊国牟婁郡になっていたが、冒頭に「大日本国志摩洲安居郡尾鷲庄」とある。汲月和尚が新たに写し置くとあるので、昔、光林寺本尊・薬師如来を、島勝浦の円通山安楽寺の十一面観音菩薩と取り替えたときに入手した縁起書を、光林寺の縁起書として書き替えたものであろう。この時期は慶長9年と推察され、元の縁起書が新宮檜杖村の寿天によって書かれたのは紀州領になる前の天正10年(1582)以前のことと思われる。市内では一番古い文書。

脇田大輔さんの講座より

縁起書について

- ・光林寺の本尊である十一面観音の縁起書(=由来書)。
- ・慶長9年(1604)、汲月和尚によって写され、光林寺に置かれた。
- ・元々は薬師如来を本尊としてたものを、安楽寺(島勝浦)の本尊である十一面観音と取り換えたと考えられ、このことから汲月和尚が写した縁起書は、本来安楽寺の縁起書だったと考えられる。
- ・元の縁起書は、寿天(新宮の檜杖村住)という人物が作製したとされるが、年代不明。書き換え箇所は冒頭の「大日本国志摩洲安居郡尾鷲庄薬王山光林寺之観音之御縁起之事」。
- ⇒浅野幸長によって実施・作製された慶長6年(1601)検地帳に尾鷲地方は「紀州室(牟婁)郡」と表記され、遅くともこの頃には紀伊国であったことは明らか。
- ⇒『紀伊国昔時國界辨』には新宮の堀内氏善の侵攻によって、紀伊国と志摩国の国境が荷阪峠となった時期が天正10年(1582)以前とあり、縁起書もそれ以前に成立したとの説もある。
- ⇒慶長9年に書き換えたならば、なぜ「志摩洲安居郡」を「紀伊国牟婁郡」と書き換えなかったのか疑問が残る。

近年の出版物からみた金剛寺の歴史

年代不詳：牛の谷の奥地に薬王山光林寺(本尊：薬師如来)創建。

慶長元年(1596)：汲月和尚が光林寺を中興する。

慶長9年(1604)：光林寺の本尊(薬師如来)と円通山安楽寺(島勝浦)の本尊(十一面観音)を交換。

元和年間(1615-1624)：南龍公(徳川頼宣)によって、高三石六斗九升五合の寺領を拝領。

正徳4年(1714)：寺号の「光林」が3代藩主綱教の院号(戒名)の「高林院」と同じであることから、寺号を「護国山金剛寺」と改める。

安永7年(1778)：寺社奉行直支配となる。

⇒ 縁起書の成立過程

1. 寿天作製「安楽寺縁起書」(慶長6年以前)
2. 書き換え者不明「光林寺縁起書」(「安楽寺縁起書」を一部書き換え)かつ本尊を交換(慶長6年以前)
3. 汲月書写「光林寺縁起書」(そのまま書写)(慶長9年)と推測すると、「志摩洲安居郡」の記述が残った理由も理解できよう。

文化財 memo

区分	市指定有形文化財(書跡)
登録	昭和30年(1955)9月10日
所在	金剛寺 尾鷲市北浦町11-8

13 山門両脇に安置された伽藍守護の神 金剛寺の仁王像

旧町
エリア

こんごうじのにおうぞう

仁王像は、口が開いた形を金剛像、閉じた形を力士像といい、ともに勇猛・獷悪の形相で伽藍を守る。昭和3年(1928)、金剛寺の山門が落成した際、鬼頭弥左衛門氏が寄進している。元々、大正3年(1914)にあるドイツ人が日本で購入し、横浜港から本国へ持ち帰ろうとしていたものであったが、同年8月に第一次世界大戦が勃発、日本とドイツは敵対関係となったため、輸送を断念し、横浜の業者へ売却したという。それを鬼頭氏が購入し、寄進。見事な力強い彫刻で、太田古朴氏(仏像彫刻師・研究者)によって、江戸時代初期の制作と推定され、身長はともに3メートル70センチ。この地域で立派な山門を有し、これほど巨大な仁王像をまつているのは、金剛寺だけだ。



文化財 memo

区分	市指定有形文化財(彫刻)
登録	昭和51年(1976)9月18日

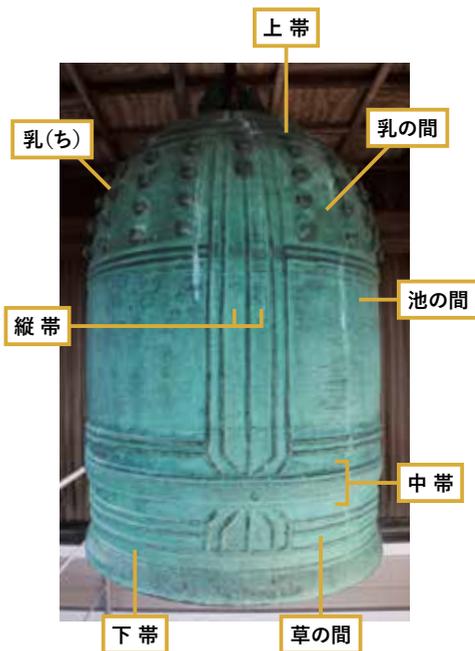
14 江戸時代後期の梵鐘

えどじだいこうきのぼんしょう

やすらぎをもたらす荘厳な響き

旧町
エリア

梵鐘といえば大晦日の「除夜の鐘」。
 煩惱を取り去って新たな気持ちで新年を迎えるために、煩惱と同じ数の108回を突き鳴らす。寺院では、主に時刻を知らせたり、法要の合図に用いられ、シンボリックな存在であるが、全てのお寺にあるわけではなく、特に戦時中、金属不足のため国へ供出されるという悲しい出来事もあった。



一口 memo
 木製の撞木(しゅもく)で突き鳴らす金属製の釣鐘。口径一尺八寸(約54.5センチ)以上のものが梵鐘とされ、それ以下の小型のものを殿鐘や半鐘と呼ぶことが多い。主に青銅製。

金剛寺の梵鐘

戦時中の供出をまぬがれた佳品



宝暦5年(1755)の作品で、梵鐘として市内最古。戦時中の梵鐘供出の際、常聲寺の梵鐘と共に優れた作品として供出をまぬがれた。全高138センチ、下帯直径76センチの巨大な鐘。

池の間四面に刻まれた内容によると、藤原種茂作で、再鑄し置くとあり、その前の鐘については池の間一面に、「金剛寺草創以来、黄鐘を鑄していたが、銘文も入れなかったし、喜捨(きしゃ)した人たちの名も知ることができない。いわゆる豊山の鐘ではあったが、年を経て古くなったのか、その洪音もとり難しくなってしまった。そのため宝暦5年にその黄銅の鐘も入れて再鑄した」と記される。

文化財 memo
 区分：市指定有形文化財(工芸品)
 登録：昭和50年(1975)3月31日
 金剛寺 尾鷲市北浦町11-8

常聲寺の梵鐘

「出大妙音」のすばらしい音色

寛政元年(1789)の作品で、全高115センチ、下帯直径70センチで、池の間四面に、藤原種茂と辻競義種の作とある。池の間二面の最後の一節に刻まれる「商舶漁舟 渡海安全」が、熊野灘に面した尾鷲浦の特性をよく表しているとされ、戦時中の供出をまぬがれた。池の間三面の「出大妙音」の通り、すばらしい音色を持つ。



文化財 memo
 区分：市指定有形文化財(工芸品)
 登録：昭和50年(1975)3月31日
 常聲寺 尾鷲市林町8-34

一口 memo
 双方の梵鐘鑄造に関わった藤原種茂は、津藩の鑄物師・辻一族。辻家種の長男・吉種が、但馬守の、次男・重種は越後守の名跡を継ぎ、代々津市釜屋町に住み、名工の誉れ高く、重種より5代目の種茂は、享保15年(1730)から天明5年(1785)までの間に、102口の銅鐘を鑄造した。

15 和風モダニズムと数寄屋風の座敷が融合 見世土井家

旧町
エリア

みせどいけ

見世土井家は、土井家本家の五世である八郎兵衛宗軒氏の三男、忠兵衛氏が分家して祖となった旧家で、山林経営とともに生活必需品などを販売してきたことから「見世(店)」の屋号をもち、「土井見世」と親しまれてきた。代々の当主は尾鷲組大庄屋や初代尾鷲町長を務めるなど、尾鷲市の歴史とも関わりの深い旧家の一つ。

主屋は昭和6年に建築された和風モダニズム。玄関周りを洋風意匠として脇に応接間があり、西側に数寄屋風の座敷等が並ぶ。敷地内には土蔵や納屋、外便所や井戸屋形といった付属建物も残り、風情ある佇まいを残す貴重な建物群である。



文化財 memo
 見世土井家住宅主屋ほか8件の概要
 区分：国登録有形文化財(建造物)
 登録：平成27年(2015)8月4日

16 常聲寺 毘沙門天石像

旧町
エリア

じょうせいじ びしゃもんてんせきぞう

中世における尾鷲の宗教状況を知る手引き

獅 子台座を持つ高さ 84 センチの石像。向かって左に「内宮清順上人」と彫られている。八鬼山参道にある不動明王は清順上人の死を弔ったもので、「伊勢内宮清順上人為頓証菩提也 永禄九年四月」とあり、常聲寺の毘沙門天の「内宮清順上人」の書体と同じであるから、この毘沙門天も永禄 9 年 (1566) 4 月、清順上人の菩提のために建立されたと思われる。石質も同じ硬砂岩で、ともに市内最古の記銘石造物。

常聲寺は天狗倉山の岩屋堂を管理する。そこには観音菩薩が祀られているが、観音像を中尊とし、不動明王像と毘沙門天像を脇侍とする形式が中世における天台宗※であることから、これらの石像は尾鷲地方の中世の布教状況を如実に物語っている。

※10世紀末頃に比叡山延暦寺で成立し、以後天台宗の寺院で多く造立される。



八鬼山不動明王

— □
memo

毘沙門天とは？
古代インドの神であったが仏教に取り入れられ、福德の神としても敬われる。両足の下に邪鬼(じゃぎ)を踏まえた姿。

— □
memo

不動明王とは？
仏道を守り、あらゆる障害、困難を乗り越える力を持った仏。正面をカッと見据え、怒った顔をしている。

— □
memo

「内宮清順上人」とは？
戦国時代の尼僧で、慶光院の第3代院主。伊勢神宮の遷宮に尽力し、天文18年(1549)、皇大神宮(内宮)の宇治橋を造替。次に永禄6年(1563)、豊受大神宮(外宮)の遷宮を129年ぶりに果たした人物。入鹿村(熊野市紀和町)出身といわれている。

文化財
memo 区分：市指定民俗文化財(有形)
登録：昭和46年(1971)12月16日

17 念仏寺 阿弥陀三尊像

旧町
エリア

ねんぶつじ あみださんぞんぞう

鎌倉末期の作品と認証された寺宝

大 乗仏教の経典の一つ「観無量寿経」に説くところの阿弥陀三尊来迎図。たて 81cm、よこ 33cm。正面に往生者を迎えるため、向かって右に観音菩薩、左に勢至菩薩を従えた阿弥陀如来が、西方極楽浄土から雲煙に乗じて来迎する様子が、写実的で繊細な筆致で描かれている。阿弥陀如来の円顔は、温顔そのもので、つぶらな眼、円満な口唇は、往生者を俯瞰する阿弥陀の慈悲相で、鎌倉末期に流行した宅磨栄賀一派の画風に通じるものがある。袈裟は茶色のくすんだ色合いで、唐草模様、乱れ蓮模様等を配した金泥文様で、概して渋味のある落ち着いた色調を主にしている。

この絵画は、元和 8 年 (1622)、僧・弁誉が尾鷲浦土井町へ念仏寺を草創した当時より、寺宝として歴代伝わったものであるが、昭和 35 年 (1960) 7 月、京都にて修理の際、京都博物館前館長土居次義博士、同館白畑技官の鑑定により、鎌倉末期の作品と認証された。



— □
memo

念仏寺は東紀州において数少ない浄土宗のお寺で、尾鷲市街地の中心部に建つ。元和8年(1622)の開創、徳本上人がここを拠点に念仏を布教したといわれている。本尊は阿弥陀如来。

文化財
memo

区分：市指定有形文化財(絵画)
登録：昭和35年(1960)10月24日
念仏寺 尾鷲市朝日町13-11

18 シダ王国

しだおうこく

自然

森の癒し植物を求めてフィールドへ

山本和彦さんのフィールドワークより

紀伊半島は温暖多雨で、海岸近くまで山地が迫る地形が点在し、生物の多様性に富む地域。このような自然環境はシダ植物の繁殖に適しており、日本でも有数のシダの宝庫として知られている。現在日本で確認されているシダ植物は約720種類、そのうち東紀州では300種をこえるシダ植物がみられる。

シダ植物の見分け方・名前の由来



コシダ ウラジロ科

ウラジロに比べて小型。本州(福島県以南)から沖縄にかけて分布。



ウラジロ ウラジロ科

葉の裏が白く、条件がよければ次々と葉を伸ばして芽をつけることから、子孫繁栄を願って注連飾りや鏡餅などの祝事に用いられる。本州(新潟県・山形県以南)から沖縄にかけて分布。



ナチシダ イノモトソウ科

大型の美しいシダで葉の長さが2メートルにもなる。本州の関東以西から九州、四国、沖縄にかけて分布。名前は和歌山県那智山で発見されたことによる。

19 暖地性草木・稀有シダの自生地 矢ノ川陰谷樹叢

自然

やのこかげたにじゅそう

矢ノ川上流の南谷と陰谷との合流点にあって、強い直射日光に当たらず、北西からの寒風にさらされることのない、シダ植物にとっては最適の地。暖地性の樹種に富み、タキミシダ、ミゾシダモドキ、ヒロハヤブソテツ、フジシダ、シロヤマシダ等のシダ植物、ナツエビネ、イワタバコ等の顕花植物、イワナンテン、リュウブ、ヤマグルマ、アオキ、ホンシャクナゲ等の樹木がある。



矢ノ川峠より

文化財 memo

区分：県指定天然記念物
登録：昭和32年(1957)3月29日



ミズスギ ヒカゲノカズラ科

シダというより巨大なコケのような姿、湿ったところに生え、その姿がスギの葉に似ていることからこの名がついた。本州の伊豆諸島、伊豆半島、東海地方以西の暖地、四国、九州、小笠原諸島、沖縄に分布している。直立する枝があり、その枝から出る側枝の先に丸い胞子が入る袋をつける。



ヒカゲノカズラ ヒカゲノカズラ科

名前は「日蔭の蔓」だが、日当たりのよくないところには見られない。万葉集にも登場。神事では筭(こうがい結髪用具)の左右に懸けて日影を遮ったり、注連飾りにも用いられた。沖縄県を除く日本各地で生育し、世界にも分布。胞子は石松子(せきしょうし)と呼ばれ、リンゴやナシの人工授粉の際の花粉の増量剤として使われる。丸葉の衣や研磨剤、花火の発火剤にも。

リュウビンタイ リュウビンタイ科

株元が太い塊状で、これが龍の鱗に例えられ、なまって「リュウビン」と呼ばれるとか。大きいものは株元の径が30センチを超える。伊豆諸島、伊豆半島、東海地方、紀伊半島南部、四国南部、九州南部以南、沖縄に分布。三重県の絶滅危惧種に指定。



タマシダ ツルキジノオ科

根に貯水球をつくり、乾燥に耐える。海岸近くの日当たりのよい場所に見られ、ときに岩や樹に這い上がる。生け花にも用いられる。本州の伊豆諸島、伊豆半島以西の暖地、四国南部、九州沖縄小笠原に分布。



イワヒトデ ウラボシ科

大きく裂けた葉を持ち、よく岩の上に着生する緑のヒトデ。本州南岸から四国、九州、沖縄に分布。

20 尾鷲で起こった千年の天変地変を経験 尾鷲神社の大樟

自然

おわせじんじやのおおくす

道路にも大きく枝を広げ、尾鷲のまちでも象徴的な夫婦楠。南側(北川寄り)のものは幹周10メートル、北側(本殿寄り)のものは9メートルに達しており、樹齢約1000年以上と推定される。紀州藩が寛永12年(1635)に行った、山林保護のための興熊野山林御定書に記録があり、当時すでに幹周6メートルの大木であったことが分かる。



文化財 memo 区分：県指定天然記念物
登録：昭和12年(1937)11月12日

21 尾鷲市の木・花・魚・鳥

自然

情熱的で、伝統があり、繁栄し、発展を続ける尾鷲

■市の木 ヒノキ ……【伝統】

江戸時代から脈々と受け継がれてきた人と自然の営み

全国有数の多雨地帯として知られる尾鷲。その恵みの雨により、木材の赤み部分が多く、年輪が細かく、強靱な良質のヒノキを育てている。大台山系を背景に熊野灘に面した尾鷲地域の林業は歴史が古く、ヒノキが主体。寛永元年（1624）に人工造林が行われてから約400年以上の歴史をもち、海上交通の利便性から関東方面との取引が行われ、特に評価を高めたのは、関東大震災において強靱性が立証されたためといわれている。



尾鷲市の市有林等において、環境保全と経済性にかなう森林管理を目的とした「FSC 認証」を取得し、適正な森林管理を行っている。

日本農業遺産第一号認定

平成28年（2016）、日本農業遺産に認定された「急峻な地形と日本有数の多雨が生み出す尾鷲ヒノキ林業」は（申請：尾鷲林政推進協議会）、次の点が評価された。

- ①急峻で痩せた土地において、適切な密度管理により、緻密な年輪が形成された高品質なヒノキを持続的に生産する独自の伝統的技術が継承されている。
- ②全国的に高性能林業機械や自動化された製材技術による低コスト林業が進む中で、伝統的技術が継承されている。
- ③海岸線までヒノキが植林されている等、地域の林業によって形成される景観は特徴がある。

古くから山師や漁師に愛されてきた 尾鷲わっぱ

名称：尾鷲わっぱ製作技術
 区分：市指定無形文化財（工技）
 登録：平成25年（2013）8月26日
 所有者：世古効史（尾鷲市大字向井）

文化財 memo

昔ながらの手法で、手間隙かけてつくられる「尾鷲わっぱ」。尾鷲ヒノキの柾目を底に、板目を丸い部分にと木目を生かした製法でつくられ、木が本来持つ調湿作用で水分が保たれるため、冷めたご飯でもふっくらおいしいと評判。古くから山師や漁師に愛されてきた弁当箱の唯一の製造元が、尾鷲市向井にある明治20年創業の「ぬし熊」で、四代目の世古効史氏が唯一の尾鷲わっぱ製作者として、この道一筋に伝統を守り続けている。ヒノキ材を板に割り、水に浸けておき柔らかくしてから曲げ、桜の皮で継ぎ目を閉じ、漆を塗る。製作工程は45工程で入念に行われる。



■市の花 ヤブツバキ …【情熱】

主に沿岸部に自生し、濃緑に赤い花は、南国的である。



一口 memo

世界の椿園

大曾根公園の一角にある「世界の椿園」には、ヤブツバキ2500本余りが群生する中に、国産種544種、外国産種187種のツバキが植えられており、9月ごろから早咲きの品種が咲き始め、翌年4月ごろまで楽しめる。

■市の魚 ブリ ……【発展】

出世魚の代表であり、熊野灘を回遊するブリを獲るための定置網漁が盛ん。



準指定 ガシ（カサゴ） ……【郷土】

定着魚であり、釣り人にとって尾鷲は心の故郷。



一口 memo

尾鷲の漁業

温暖多雨な気候と黒潮によって自然の恵みを受け、古くから漁業が栄えた尾鷲。浦々には天然の良港があり、尾鷲港を中心に、近海・遠洋・沿岸漁業を営みながら発展。ブリの定置網は隣の紀北町島勝浦で明治31年（1898）に始められ、尾鷲市でも明治32年（1899）から九木浦で操業されるようになった。

■市の鳥 アオサギ …【繁栄】

尾鷲湾内の佐波留島で生息する。アオサギの繁殖は、海の豊かさ、きれいさの象徴である。



佐波留島

アオサギの集団営巣地、日本最大のコロニー!?

文化財 memo

区分：県指定史跡名勝記念物（天然記念物）
 登録：昭和44年（1969）3月28日
 尾鷲湾の湾頭にあり、吉野熊野国立公園の特別保護地区のため、上陸には許可が必要。島全域が暖帯性の常緑樹林に覆われ、主な樹種はクロマツ、アカマツ、スダジイ、タイミンタチバナ等、樹陰にはサカキカズラ、ナギラン等。また、アオサギ、コイサギ、クロサギ、シロサギ等のサギ類が生息し、日本でも最大のコロニーと思われる。西半分（尾鷲湾側）と東半分（太平洋側）で全く地質が異なる特徴があり、西は砂層・泥岩、東は花崗斑岩からなる。高さ20メートル以上の節理が発達し、海食洞も。地元の人はその姿から「ムーミン島」と呼ぶ。



22 八鬼山道の町石

八鬼山
エリア

やきやまみちのちょうせき

安土・桃山時代に花開いた尾鷲・伊勢の信仰と交流

伊藤裕偉さん、野田敦美さんの講座より



世 界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の「熊野参詣道伊勢路」。その中で、西国三十三所巡礼が盛んであった江戸時代に「西国一の難所」と呼ばれた「八鬼山道」は、尾鷲市街地南部に聳える八鬼山を越える石置の道。伊勢路の山越え（峠越え）で、山頂を通るのは八鬼山道だけで、「七

曲り」と呼ばれるジグザグの道が巡礼者を阻み、道中記には「殊之外難所也」など急峻な様子が記されている。また、長崎県杵岐や広島県からの行き倒れた巡礼者を弔った碑も付む。この八鬼山道沿いに「町石」と呼ばれる地蔵菩薩立像を刻んだ石造物が35基残されている。町石は1町(109メートル)ごとの距離を示す道しるべ。そこに刻まれた地名や人名から、16世紀末の天正14~19年(1586~91)ごろ、伊勢山田(現伊勢市)の御師や僧侶、地下人などによって奉納されたと考えられる。

八鬼山道には清順上人の供養のために作られた不動明王像や荒神堂の本尊である三宝荒神像など、もさまざまな石造物がある。八鬼山道は熊野参詣道のなかで屈指の、古い石造物が集中するところなのである。

伊藤裕偉さんの講座より

八鬼山道の町石について、わかっているポイント

- [1] 残っているのは35基
- [2] 確認されている最小数字は「15丁」、最大は「50丁」
- [3] 町数表記のないもの、全く無銘のものもあるが、総じて町石と呼んでいる
- [4] 紀年銘は天正14年(1586)~19年(1591)まで
- [5] 熊野参詣道伊勢路の中で、八鬼山道にしかない
- [6] 町石とは目的地まで誘導するもの、必ず終点がある

同じようできて、微妙に違う!お地蔵さん、注目ポイント

- [1] 蓮華座のカタチを比べてみよう。立体的なもの、U字形の受けがあるもの、鋭利な線刻で表現されたものがある。
- [2] 身につけた衣装は?袈裟は交差する線、大衣は下弦の弧状線、くん 裙は左下がりの斜め線で表現。もしくは袈裟は単線、大衣と裙は一連の下弦弧の線。
- [3] 頭部と体の位置は?まっすぐなもの、頭部が左側(向かって右側)に傾くものがある。
- [4] 耳の表現は?簡素なもの、デザイン化された細かいものなど。



銘文を丁寧に判読していくと...

- [1] 丁数、造立年月日、造立者、供養者、住所などが記載されている
- [2] 大湊・山田などの「都市」に住まう人々の名が見える
- [3] 神宮御師おんしの名が見えるが、神宮家や三方家といった有力御師家は見られない
- [4] 山田内地の地名がいくつかある(岩淵・船江など)
- [5] 筆跡の柔らかい文字は伊勢(山田)で、硬い文字は尾鷲で刻まれた(修正も含め)可能性が高い



文化財
memo

名称：八鬼山町石及び関連石仏(石造三宝荒神立像、石造不動明王立像)37基
 区分：県指定有形民俗文化財
 指定：平成27年(2015)3月5日
 昭和53年(1978)2月7日に「八鬼山町石及び石造三宝荒神立像、不動明王立像(33基2躯)」として指定された、平成27年3月5日に2基を追加し、名称変更。その後、1基(町石31)の破片が発見され、同年9月17日に規模の変更。

平成27年に発見された町石(破片)から考えられることは...

- [1] 現在は35基しかないが、刻まれた数字には「五十丁」があるので、今後も増える可能性がある
- [2] 破片の発見地点はこれまでの町石の終点から500メートルほど南に延長→町石が「桜の森広場」方面へと続いていた可能性が出てきた
- [3] 「桜の森広場」には町石と関係する何かがあったのかもしれない



桜の森広場

八鬼山と町石の謎は深まる...

八鬼山の山頂へと導く町石の意味(目的)は一体、何?

- 想定 [1] 「桜の森広場」あたりに寺院建立計画があったが、途中で頓挫した
- 想定 [2] 寺院は完成していたが、それが完全に破壊された(もしくは忘れ去られた)
- 想定 [3] それ以外(日輪寺が元々は山頂にあった?)

八鬼山には
まだまだ
謎が
いっぱい!

23 八鬼山 荒神堂

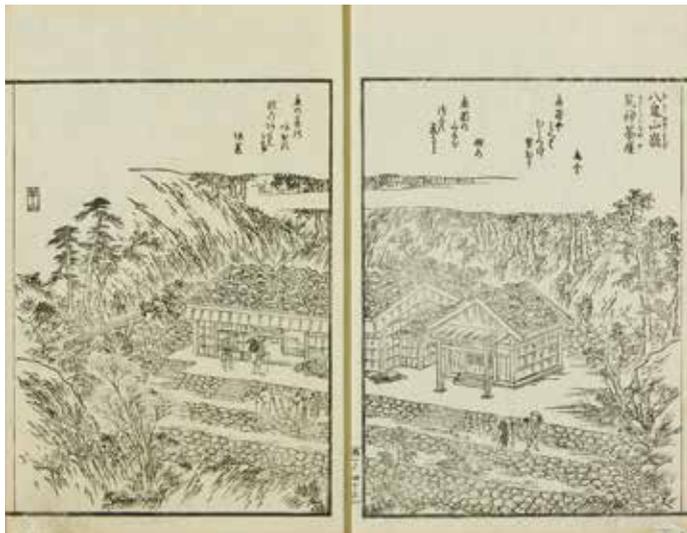
やきやまにちりんじ
こうじんどう

八鬼山
エリア

『西国三十三所名所図会』にも描かれる八鬼山のシンボル

熊 野古道伊勢路で「西国一の難所」と恐れられた八鬼山越え。頂上付近にある八鬼山荒神堂日輪寺は、江戸時代後期、嘉永6年（1853）発行の案内書『西国三十三所名所図会』にも描かれる八鬼山のシンボリックな存在。挿絵には向かって右に荒神堂、左に茶屋が描かれ、当時の荒神堂は板葺きの切妻屋根だったことがわかる。

『西国三十三所名所図会』 八鬼山嶺 荒神茶屋



荒神堂は、神道と仏教が融合して成立した修験道の寺院である。正確な建立時期は不明だが、少なくとも400年以上前から信仰されていた。寺の言い伝えでは大宝2年（702）、修験者阿闍利返昌院仙玉法師によって開かれ、天正年間の初め頃（1573年頃）、権大僧都各真法印が中興という。西国三十三所第一番札の前札所として、八鬼山を越える巡礼者が道中の安全を祈って参拝に訪れていた。

お堂に祀る石造の三宝荒神立像には、天正4年（1576）の銘があり、清順上人供養のための石造不動明王（永禄9年銘）が造立されて数年後、また町石の整備よりも前に造立されている。中興に関わった各真の没年は天正4年正月28日と伝えられており、当時の修験者が各真の徳を称えて、荒神石像を奉納したものと思われる。



木造の弘法大師像
九鬼町の住民から寄贈された弘法大師像。徳島県勝浦町にある四国八十八カ所霊場の20番札所・鶴林寺から譲り受けたもの。



**修復された
木造の三宝荒神立像**



[石造三宝荒神立像の銘文]

信苧之住人各真権大僧都
八華山日蓮此時本願
三宝大荒神本尊
天正四年
今月今日所願成就如意

- 信州（現長野県）に住んでいた僧の各真（権大僧都）が本願主
- 「八華山日蓮」は「八鬼山日輪寺」?
- ベンガラと金泥を塗布

手入れされなくなって20年ほどが経ち、お堂は屋根が崩れるなど荒廃が進んでいたが、尾鷲市の地元有志により「八鬼山荒神堂改修プロジェクト」が立ち上がり、その後「一般社団法人八鬼山荒神堂保存会」を設立し、広く寄付金を募集したところ、地元企業や住民をはじめ全国から多額の浄財が寄せられ、工事を進めた。かつて尾鷲や熊野の人々が交流し、それを八鬼山に結実させた想いは、次の世代にもつなぐられ、大勢の人々が関わり続けている。



[象の飾りと下書き]
入り口部分、向拝木鼻の象の飾り。軒の天井の板に下書きがあり、装飾を彫る前のものと思われる。



[梁の銘文]
明治貳拾六年巳七月
作人大工尾鷲高町世古昌吉仲丞吉

解体で確認された梁の記録から、令和の建て替え前の荒神堂は明治26年（1893）の建物であることがわかった。堂内の壁には軍人が書いたとされる辞世の句や昭和初期の年代が記されていた。太平洋戦争の頃、荒神堂は武運長久の信仰を集めていたことが本堂の解体によって知ることができた。

24 向井遺跡出土品

八鬼山
エリア

むかいいせきしゅつどひん
縄文早期から前期の貴重な遺物

尾鷲市大字向井の集落西北隅に位置し、昭和29年(1954)に発見された。昭和33(1958)年、奈良国立文化財研究所の坪井清足氏が調査され、「向井式土器」の仮称で注目されはじめた。

この遺跡を都市計画道路の茶地岡～向井線が通ることになり、昭和53年(1978)に第1次調査、昭和56年(1981)に第2次調査が行われた。出土品は、昭和29年以来、表土採集された石器・土器片に、第1次・第2次発掘調査で出土した石器・土器片を加えて、小破片とも約1500点におよぶ。ほとんどは縄文早期末葉のもので、縄文前期末葉・弥生式の各1片も含まれ、学術上、貴重である。終了後に遺跡は道路となった。



文化財 memo | 区分：市指定有形文化財(考古資料)
登録：昭和56年(1981)12月9日

こんな民話が!

若者二人が出会った証、袖片橋(そでかたしばし)

昔むかし、ある日の朝、水地浦*から尾鷲湾をはさんで対岸の向井村※に、一すじの煙の上がるのが見えました。水地浦の人々は対岸にも人が住んでいると思い、また同様に向井村の人々も対岸にあがった煙を見て、対岸に人が住んでいると、若者を走らせて確かめようとなりました。それは水地浦でも同じで、若者を出すことにしました。この二人が出会ったのが袖片橋です。この橋は矢浜村の北の入口にある石経様の北を流れる小川にかけられた石橋で、二人は対岸にも人が住んでいたと喜び、日の暮れるまで話し合いました。さて別れるのときとなり、何しろ途中で会ったので、お互いに対岸まで行ったわけではありません。それで二人が確かめた証にと、お互いの片袖をもぎとって交換しました。それ以来、袖片橋と呼ばれるようになりました。

※水地浦は、天倉山半島の尾(尾根)の端にあることから、尾端(オハシ=尾鷲)になったという説があり、尾鷲発祥の村といわれる。

※向井村では縄文早期の約7600年前の土器片が出ていて、やはり尾鷲では古い村。



25

八鬼山
エリア

南朝の伝説を偲び、優雅な上品さ漂う 矢浜浄土宝篋印塔

やのはまじょうどほうぎょいんとう

尾鷲では珍しい関東方式で室町期のもので、高さ73センチ。宝珠と笠の隅飾突起の一部が破損しているが、全体としてよく保存されている。

南朝のある王子が、難を逃れて矢浜で永住され、浄に入れられた(死没)という伝えが残り、主は後醍醐天皇の第一皇子である護良親王から6代目となる西陣親王の第3皇子で、御名を桂城(かつらぎ)宮綴連(つづれ)王重信(しげのぶ)だという。

この印塔は故・野田庄八氏の父が地中から掘り出したもので、そのとき破損の甚だしい一基もあったようだが、再び埋められて今は不明。基礎の幅は34センチ、笠の幅は28センチと、笠に比べて基礎が大きいので、笠は桂城宮の夫人のものではないかとされている。室町初期の気品高い印塔である。



文化財 memo | 区分：市指定有形文化財(建造物)
指定：登録昭和48年(1973)2月13日

26

八幡峠
エリア

名勝地にひそむ落人伝承 城山女王滝

しろやまじょうたき

国道425号の八幡トンネル西口より古川沿いに約1.4キロさかのぼると女王滝があり、古川右岸に城山がある。この城山は約900アールほどで、周囲は空堀に囲まれている。

古くからの言い伝えに2節あり、平家滅亡の時に平家方のある女王がここに逃れたとも、また南朝のある王子が逃れてここに住んだともいう。

西陣新王の第3皇子である桂城宮重信親王は、1531年10月16日、楠・野田の忠臣に護られ、矢浜に住み着き、浄に入ったといわれる。重信親王が矢浜に在住中も、北朝方の追手が厳しく、この城山にときおり避難したという。南朝の数少ない史跡として、また付近一帯は景勝地である。



文化財 memo | 区分：市指定史跡名勝記念物(史名)
指定：昭和54年(1979)10月1日

こんな伝説も!

南朝のある王子が、女王滝付近の城山に隠れ住んでいたとき、ある日訪ねてきた行者に髭をそらせた。この行者は足利の刺客で、剃刀を逆手に持ちかえたところ、それが水鏡に映り、王子は傷を負ったものの難を逃れ、そのとき受けた傷を治した後は、矢浜野田地に安住したという。

27 尾鷲節

おわせぶし

文化

風待ち港で唄い、踊られてきた民謡

「ヤサーホーラエー」と軽妙で明るい節回しの尾鷲節は、芸所で受け継がれし民謡に、歌詞数も多く、伝統の中で風土に根差して受け継がれてきた。

祭りや運動会でも親しまれている。



本唄ではまず、頭の上で「お獅子をまわす」振り。これはヤーヤ祭に登場する御神体の獅子頭を紹介したもので、続く両手を上げる振りは、尾鷲湾に昇る美しい朝日を眺めた姿。そして両手を頭上で合わせる振りは、見渡す限りの勇壮なる山々を表し、泳ぐように抜き手を切り、目の前に広がる国市の浜での様子を表現している。

林 業と漁業が盛んな尾鷲は、17世紀中頃、江戸と大坂を結ぶ航路により、風待ち港、避難港として賑わった。各地からさまざまな物資や文化が持ち込まれ、港町では船乗り相手に花柳界が栄え、その酒席の騒ぎ唄として尾鷲節が唄い踊られてきたという。

尾 鷲節の元唄となったのが「なしよまま（節）」。言い伝えによると、慶長20年（1615）、大坂夏の陣の戦いに忠節を尽くした真田一族が紀州路に落ちのび、尾鷲の野地殿（現野地町）に身をかくまった。一寒村に身を寄せた一族のうちには風流人も多く、悲しい憤りの心中を「なしよままならぬ、なしよままならぬ、なしよになる身をもたせたや」（なしよ＝何故）と哀調ある節回りで唄ったのがはじまりとされている。一方、漁師が鰯を漕ぎ網を曳くときに唄ったものだとする説と、山で木を伐り出す仙人たちから出たのではないか、という説もある。

こ の「なしよまま」に北浦町で盛んな神楽の笛や太鼓が加わり、古い道中唄が取り入れられ、大正14年（1925）、オリエンタルレコードでレコーディングを行ったとき、「尾鷲節」と改名された。さらに時勢の流れに応じて新しい歌詞も加えられ、吉川英治や野口雨情の作も出るに至り、昭和23年（1948）には保存と普及を目的として尾鷲節保存会が発足。

現

在の尾鷲節の振り付けは「柳蛙（りゅうあ）会（昭和11年設立）」の初代会主である坂東楽鐘（初代・伊三栄）が振付けたもの。神戸から尾鷲に嫁いだ楽鐘が、尾鷲駅の鉄道開通式（昭和9年）の祝いに披露した舞踊が評判になり、芸妓さんも含めて踊りを教えることに。そして昭和24年（1926）、当時の尾鷲（おわし）町長や町会議員から、尾鷲節に誰もが踊れる新たな振り付けの依頼があり、尾鷲神社の祭礼などを参考にして考案。その動きは凛々しく、衣装も独特。サラシに黒の筒袖法被、白いパンツに膝上丈の腰巻という出で立ちで、頭には豆絞りの鉢巻きを結わえ、昔の勇ましい漁師の姿を再現した。



尾

鷲節の特徴は本唄が終わってから転調し「中村山のお灯明あげ 国市の 国市さまの夜ごもり」という道中唄の一節を取り入れた中唄が入る。昭和29年（1931）、全国民謡大会で第3位となって注目を集め、全国から歌声自慢の参加者が尾鷲節を披露する「全国尾鷲節コンクール」は、昭和60年（1985）から続く伝統ある秋のイベントとなった。



市内に点在する尾鷲節歌碑。左から、馬越公園、馬越墓地近く、駅前児童公園前、八鬼山道登り口付近。



文化財 memo

名称：尾鷲節笛
区分：市指定無形文化財（芸能）
登録：平成18年（2006）10月20日
所有者：山西敏徳（尾鷲市中井町）

尾鷲神社祭礼の奉納行事として伝承されてきた神楽は、起源が明らかでないが、一説に寛政年間（1789～1801）四日市阿倉川より師を招いて習得したと伝えられる。この阿倉川の源流は伊勢神宮の神楽で、市内では北浦町・矢浜町・九鬼町・早田町・名柄町に流儀が残る。山西家2代目・宇八が名笛手として知れ渡ったのも寛政・享和年間（1801～04）のころで、その後文化年代（1804～18）に尾鷲節の隆盛期を迎え、神楽の笛・太鼓・小太鼓が、そのまま尾鷲節に溶けこんだ。7代目の山西敏徳氏は、5代目仲市の10番目の子として生まれ、物心ついた頃から父の笛を耳にし、父亡き後、兄である6代目重徳の家業を手伝いながら笛を身に付け、先祖伝承の名笛を守る。

28 集落に伝わる民間信仰

文化

かつての生活を垣間見ることができる祈りのサイン

■家崎彰さんの講座より

■浅間さん

富士山は古代から霊山として信仰の対象であり、浅間神社は里宮にあたり、静岡県富士宮市の富士山本宮浅間大社を総本山とし、全国に1300以上の分社がある。中世には富士登拝を行なう富士道者が増加。江戸時代には長谷川角行（かくぎょう）という者が現れ、浅間神社から独立した富士講もつくられた。



矢浜の虫送り行事「浅間様参拝」

7月1日には矢浜青年団の「虫送り行事」があり、矢浜岡崎野田の桂山に祀る「浅間様」を参拝。明治42年（1909）から続く行事で、お札を付けた青竹、お神酒、果物などを供え、豊作を祈願する。石像には、大日如来と富士山が刻まれている。

■火伏せの神仏 秋葉さん、愛宕さん

火伏の神仏の代表格、秋葉さんは烏天狗とされる三尺坊秋葉大権現。浜松市天竜区にある秋葉山が本山。愛宕大権現の愛宕さんは、京都で最高峰の霊山・愛宕山頂に鎮座し、「火適要慎（ひのようじん）」と書かれたお札を台所に祀る。

奥山半僧坊大権現

北浦町の八幡神社境内には、徳栄丸が勧請した奥山半僧坊大権現が祀られている。浜名湖の北、引佐の奥山にある方広寺の鎮守。また八鬼山荒神堂には、火伏の神「三宝荒神」が祀られている。



■山の神

山を支配する民間信仰で、多くの土地では山の神は女神だという。男神や夫婦神としている例もあるが、女神としている地方では、この神は容貌がよくないので嫉妬深く、女人が山に入るのを好まない。昔から山は神聖視され、畑が豊作に恵まれるのは山の神のおかげ、また洪水や土砂崩れなど自然災害は山の神を怒らせたためと信じられてきた。山は万物を生みだす源であり、すべてを受け入れる「母」のような存在であることから、口やかましい妻のことを皮肉も交えて「うちの“山の神”が…」などと呼び、親しみをこめて「カミさん」に変化したといわれている。

オコゼで大笑い「山の神」

毎年2月7日に矢浜地区にある桂山山中で行われている「山の神」は、男たちが山に集まり、懐からオコゼをチラリと見せて、「ワッハッハ」と一斉に大声で笑う。農耕具の木製模型や木製の男根型も供えられ、豊作を祈る。



矢浜樋ノ口に山の神と並ぶ「狼の宮」

安永9年、新田で作業中の百姓4人と牛にオオカミが噛みつき、翌日に八鬼山で長州の巡礼一人が額を噛まれた。その2日後に、オオカミは山の神に近い主ヶ谷でしとめられ、村はずれに埋められた。オオカミの祟りを鎮めるため、「狼の宮」を祀った。



■集落入口の庚申さん

庚申とは干支でいう庚申（かのえさる）の日を意味し、この夜に人間の体の中にいる三尸の虫が寝ている間に体から抜け出し、天帝にその人間が行った悪行を告げに行く。天帝は寿命を司り、悪いことをした人は罰として寿命が縮められるという。三尸の虫は人間が寝ている間しか抜け出ることができないので、庚申日は徹夜をする。これを庚申待ちといい、いつの頃からか三尸の虫を喰ってしまう青面金剛を拜むようになった。

また庚申さんは失せ物を見つけてくれるともいわれ、藁縄を縛り付けた庚申さんをよく見かける。念願成就した時には、縄を外し、お礼詣りも熱心。



林町の「庚申講」

集落の出入り口にある庚申塔には貞享3年（1686）と刻まれる。60日周期で巡ってくる庚申の日の夜、人々は身を慎み、徹夜して過ごす庚申講が今も継続されている。



29 尾鷲弁

文化

人情味あふれる尾鷲コトバ

おわせべん

生まれてから今日まで、標準語だと思っていたけど実は方言だった、なんてことが尾鷲にはたくさんある。

尾鷲では同じ市内でも山1つ越えればコトバは違う。

全国放送のテレビニュースでインタビューに答える尾鷲弁に、標準語のテロップが出るといったのも語りぐさ。



1 独特のアクセント

日本語の方言の式の典型からはずれる、音韻的な特徴を持った複雑なアクセント

2 敬語といったものが極めて貧困

人称の場合、「私」、「あなた」はよそいき。

私(たち)は→おれ、あし、わがら。あなた(たち)は→いな、あんた、おまえ、いなら等。

日常挨拶「お久しぶりです。お寒うございます。お変わりありませんか」

→「さあしかぶりやなあ。寒いなあ。まめなかい〜」

3 断片的で前置きが少ない

駄菓子屋に(子ども)「売って〜」と店に入る。

(店主)「何を？」(子ども)「これ」(店主)「どんだけ？」(子ども)「こんだけ」

と会話は、放り投げるように断片的で、

情は厚いのに怖がられたり勘違いされることも多かった。

4 現在進行形のコトバは「…しーよる」

行きつつある→「いっきよる」、走りつつある→「はしんりよる」

5 最大級のコトバ「きってく」「どいろ」、単に「ど」

足が速い→「はやきってく」、おいしい→「うまきってく」

よくできてますね→「どいろよーできとるんなあ」

とてもおいしい→「どうまい」

6 語尾が「ヤリ」

目上の人には「ナ」をつけるが、

友人関係だと「ヤリ」という助詞が使われる。



これを覚えて安心! 尾鷲コトバあれこれ [方言/意味/使い方]

(尾鷲弁/意味)

(例文)

あいだま/あいそなし	あがとしたんやろ
あかと/自分で	まーいっどー、はよこいえー
いっどー/行くよー	競争になるといきってくるんさー
いきる、いきっとる/いきりたつ事	はよいらい
いっどー/行こう	うつつけたるじょー
いっけんりゅう・いっけんじゅう/水辺に頭から飛び込むこと	
うつつける/なげる、ぶつつける	
おさすり/かしまち	
おっしやい/押し合い	おっしやいすんないー
おーとつちよー/びっくりしたよー	おーとつちよー、がいなもんやにやあ
かいだりー/疲れた	かいだりきってくよー (すごく、疲れた)
がいに/強く	がいに、しばっといて
かしまる/正座する	かしまつとけいー
かしん/お菓子	かしんばっか食べんな
がり/元気な子、やんちゃ	この子はがりすけや
きづつない・づつない/心苦しい。苦しい、お腹いっぱい	そんなにしてもたらきづつないよー
こいまー/きてねー	ちょっとこいまー
ごーいらす/こまらせる	ちょっとごーいらしたろかー
こっぺ(こっぺる)/おとなぶる、ませている	この子はこっぺとるなー
こんじょくさり/いじわる、ひねくれ者	あの人、こんじょくさりやなあ
しる/大声でわめく、泣く	何しんりよん? (何泣いてるのー?)
しまう/整頓する、なおしておく	ちゃんとしもとけいー
すます/返す	借りとったもんすますわー
たかなし/無制限、わがまま	あのこはたかなしじゃなあ
だだくさ/ぞんざい、だらしない	ものをだだくさにすんない
ちやっと/早く	ちやっとせい!
つる/かつぐ、運ぶ	机つってー
てき/彼	てきらーもう行つたでー
どいろー/大変に、大きい、たくさん	どいろ、お世話になって
どすかん/非常にきらい	あの人だつきやあどすかんのー
とつちやがってく/びっくりしてしまう、アガッてしまう	
はだ/うるこ	この魚のハダ取つていて
ばたくる/もがく、あばれる	あんまりばたくんな
はっさい/おてんば	この子ははっさいやにやあ
ひきさがす/物をちらかす	ひきさがさんと片付けーい
ほーばい/友達	あの子とほーばいなんさー
まーおらいやでー/おどろいた、あきれたの女性語	まーおらいやでー、そんなんかい
やめる(病める)/痛む	腹がやめてなー
やもた/いやになった、あいてくる	まーやもてきてなー
よれとる/いっぱいある	アサリはよれとつたでー
わりやー/お前(人をのしる言葉)	わりやーごーわくんにやあー
うっちゃま、せんぎやま、やっきやま/すべて「山」のこと(内山、瀬木山、八鬼山)	

尾鷲といえば

おわせといえば

あなたの思う文化財にしたい尾鷲を記入してみよう

尾鷲ヒノキ

林業としての魅力製品としての魅力
尾鷲わっぱやアートなど様々な利用方法
炭焼きなど

一本の立派な
ヒノキになるまで育成

山の中の
途絶えている道
発掘

尾鷲トレイルの
出発&ゴール

百名山・大台ヶ原に
行く尾鷲道

登山の魅力

熊野古道の魅力
森林鉄道再発見など

八鬼山の
町石は
ペロ出し地藏、
あそび心に
満ちた表情で
ほっとする

八鬼山荒神堂は
西国一番札所の
前札所

絶景ポイント
おちよぼ岩、天狗倉山
便石象の背

茶じふ、じふ
(魚のすき焼き)

魚料理

新鮮魚介/ご馳走
普段の料理など

魚料理の
講習会が
あること

漁師の暮らしは
天の神様次第と言われて、
まじないとしか
思えないような事が
真剣に行われています

日本一の雨
尾鷲の雨のスゴサ
尾鷲傘など

漁業

様々な漁法/加工から流通まで
地元ならではの魚、
水産物など

大雨の時は話し声が大きくなる
(雨の音で聞こえないから)

雨天時は学校の体育館で
先生の話が聞きづらい

お盆行事は
浦々によって
違いがあります

助け合いの
できる心

市内全体の祭り

実はやさしい
尾鷲弁

どっぷり尾鷲

ヤーヤ祭り/尾鷲弁など

八鬼山麓で
倒れた巡礼者を
故郷へ送り届けた
記録がある

陸の道

熊野古道
魚の道(吉野)
など

海の恵・山の恵

カツオ/イタドリ
茎漬けなど

海の道

江戸時代、海の東海道
近代の繁栄など

それぞれの浦には
地域によって違いがあります、
あげればキリのない程です

※福田良彦さんの講座「地域の文化財をいかにする」より